

「こども学」から広がる地域の輪

坂井 三智子

大正大学 地域構想研究所 奄美支局
(鹿児島県奄美市)

奄美大島は九州から南へ約380km離れた北緯28度の島で、九州と沖縄本島のほぼ中間に位置しており、奄美群島（奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島）の中心的な島である。太古の昔に大陸から遮断された島なので、独自に進化した動植物や固有種が多く、奄美・琉球諸島として世界自然遺産登録を目指している。世界自然遺産に登録されるためには、自然の資質が一定の基準を満たしていることに加え、その自然の資質を損なわないように保護措置が取られている必要がある。環境省は『奄美地域の自然資源の保全・活用に関する基本的な考え方』を示し、亜熱帯照葉樹林を中心とする生態系全体を管理する『生態系管理国立公園』、人間と自然が深く関わり調和してきた関係そのものを対象とする『環境分化型国立公園』という、これまでにない国立公園を目指すことを発表している。

2017年2月に開局した奄美支局では、2018年度から『子ども学』という地域に根差した人材育成事業を展開している。7月から12月までの期間で全10講座、合計で178名の子どもたちが参加し、大盛況ののち終了することができた。2019年度も、連携自治体及び教育委員会（奄美市、奄美市教育委員会、龍郷町役場、龍郷町教育委員会、宇検村役場、宇検村教育委員会、大和村役場、大和村教育委員会）にご後援を頂き、パンフレットの各学校への配布とご案内をいただいた。また、地元紙の南海日日新聞社、地元コミュニティFMのあまみエフエムにもご協力いただき、無料で告知をしていただくなど、多大なるご支援をいただいた。

『子ども学』は、相手への思いやりを育む「こ

ころの育成」、自分たちの周りにある仕事を学ぶ「キャリア育成」、遊ぶことで他者との関係性構築や癒しを学ぶ「あそびの育成」、これらの3つを柱として企画・運営を実施している。2019年度の内容は、昨年度のプログラムに加え、環境分化型であることを子どもたちに少しでも知ってもらえたらと思い、奄美の自然や文化をより感じてもらうように企画をした。

『こころ学』として「心を込めて花を贈ろう」、『しごと学』として「看護師のおしごと」・「こども新聞講座」・「ラジオのおしごと」・「建設のおしごと」・「CAのおしごと」・「アナウンサーのおしごと」、『あそび学』として「マジック講座」・「自然を学ぼう」・「シマウタに触れよう」を開催した。『こころ学』の講座自体は一つだけだったが、終わってみると全ての講座が『こころ学』に通じていたようにも感じた。

講座の中からいくつかの講座について、以下の通りご紹介したい。

8月に開催された「心を込めて花を贈ろう」では、だれかのことを思いながら花のアレンジメントを作る、という内容だった。何よりも大切なのが、「誰のために送るのか」ということを考えることである。贈る相手をイメージして花を装飾していくと、この世に二つと同じものはできない。その人を想って作るのだから、「人と違っていい」「自由に作っていい」のだというアドバイスが与えられると、子どもたちは周りの子の様子を気にも留めず、それぞれに贈る相手をイメージすることに集中して作成していた。

最後に講師の先生より伝えられた言葉は、この講座が、子どもたちに『気付き』を与えるきっか

け作りであったことを象徴していた。

「見えない気持ちや想いを形にするのが花束だ
と思う。そして奄美にはたくさんの花がある。そ
の中でもシャリンバイは奄美市の花でもあり、奄
美の伝統工芸品大島紬の染色に使う花でもある。
道路わきにもたくさんの花が咲いている。そして
山にはたくさんの貴重な植物や花がたくさんある。
素晴らしい環境で育っていることに感謝し、感心
を持ち、今までよりは少しでも道端の花にも意識
を持ってもらえたら嬉しい」



写真1 どんな時に花を贈るのかをみんなで考えた

10月に開催した「シマウタに触れよう」は、2019
年度が初めてとなるプログラムだった。講師とし
ては、島唄者である中村瑞希さん・松元良作さん
にお越しいただいた。奄美の伝統文化である『シ
マウタ』は、現在も伝承していくために、学校で
の運動会や文化祭などでも披露される演目となっ
ているが、『島唄』ではなく『シマ（集落）ウタ』
であることや、シマウタの歴史・種類、歌われる
歌詞の意味、そして六調（奄美の宴の最後に踊ら
れる踊り）の踊り方など、学校では学べない深い
部分のシマウタについて、教えていただいた。



写真4 シマウタのいろいろな話を聞いた



写真2 講師の先生から花材のことを教えてもらった



写真5 地域実習に来ていた大正大学の
学生たちも一緒に参加



写真3 贈る相手をイメージして
それぞれにアレンジメントを作った



写真6 六調をみんなで踊った

11月に開催された「アナウンサーのおしごと」では、鹿児島より南日本放送のアナウンサーをお二方お招きし、子どもたちに本物のアナウンサーと触れあってもらう機会を作ることができた。テレビで実際に見るアナウンサーを目の前にして緊張している子どもたちもいたが、テレビカメラの前で原稿読みをする体験はなかなかできることではないので、貴重な思い出になったのではないかと思う。

講師のほとんどは地元の方々をお願いしていた。どの講師の方も、「奄美は離島なので不便だと思うこともあるかもしれないし、都会のほうがキラキラして楽しそうに見えるかもしれない。だけど、私たちの住む奄美はどこにも負けないくらい素晴らしい島である」ということを伝えてくださった。自分たちの住む地域のすばらしさや、そこで働く人たちのすばらしさ、将来の夢など、色々なことをこの『子ども学』で感じてもらえたのではないかと思う。

2019年度は募集期間が2週間と短い期間だったにもかかわらず、前年度よりも早く定員に達していた。また周りの方々からも『参加したかった』との声をいただいたこともあり、より『子ども学』に注目していただいているのではないかと思っている。講座が始まって数か月した頃、とある行政機関の方から「とてもいい講座だと聞いている」という言葉も頂いた。認知度も確実に上がっているように思う。

また、奄美支局では「なぜまち商店街」の活動にも積極的に参加させていただいている。夏・秋に開催されるお祭りや、歳末大売り出し・初商いでの振る舞いイベントなど、商店街の皆様と地域活性化に取り組んでいる。また地域の皆様ともさらに輪を広げていけるように活動していきたい。子どもたちがあそびに立ち寄ってくれる機会がとでも増えたので、今後もさらにそうした子どもたちのための環境を整えていきたいと考えている。

以上